

地域創生のための、充実の総合情報を毎月お届けします

第25号



創刊2周年記念

地域人

CHIKIJIN

巻頭インタビュー

石山 洸

デジタルセンセーション
取締役 COO

特集

地方と世界つなぐ ビジネスリーダー



マイファーム代表取締役

西辻一真

中川政七商店代表取締役社長

十三代 中川政七

ブルースタジオ専務取締役

大島芳彦

バリューマネジメント代表取締役

他力野 淳

GIAHS ライフ阿蘇理事

大津愛梨

左官職人

久住有生

八面六臂代表取締役

松田雅也

龍泉刃物代表取締役社長

増谷浩司

対談

リディラバ代表理事

安部敏樹



養老孟司



新連載

高校連携で始まる人材循環

【佐渡中等教育学校】

浦嶋太郎

連載

人間と自然資源

【大峰山・吉野】





ヨルグ・ゲスナー氏がデザインした「Butterfly」。

創業百余年、京都で5代にわたり和傘を製造している老舗「日吉屋(ひよしや)」が、京和傘の伝統技術を活かして作った和風照明シリーズ「KOTORI」が今、話題になっている。

一般家庭での利用や贈り物としても人気があり、さらには店舗、レストラン、商業施設やホテルなどからの問い合わせも多いという。

「弊社では江戸時代から伝統工芸の京和傘を制作していますが、ライフスタイルの変化に伴い、伝統的な商品だけでは限界を感じていたなかで、2004年(平成16)頃より和傘の技術や美しさを活かせる新たな商品

開発に取り組んで来ました」

そう話すのは、日吉屋5代目の西堀耕太郎さん。和傘の持つ幾何学的な竹の骨組みや光を透過させる手すき和紙の美しさに気付き、これを発展させて照明器具に転用することを思いついた。

試行錯誤を繰り返して、最終的には照明デザイナーたちのコラボレーションプロジェクトを本格的に開始し、2006年12月に発売に至った。

傘のように開閉することができ、コンパクトに収納・運搬できることも「KOTORI」の特徴の一つ。アジア、ヨーロッパ、北米、オセアニアなど海外からの注文もコンスタントにあるという。

また最近では、パリ在住の和紙を使うデザイナー、ヨルグ・ゲスナーさんともコラボレーションをしており、氏による「Butterfly」、「KANZE」、「NICHIRIN」という3種類のデザインも人気を博している。

「2008年に、ドイツで開催されたインテリア関連の国際見本市会場で、知り合いから商業デザイナーとしてヨルグ氏を紹介されました。その時、『和傘の構造に興味がある』と彼が話

して、後日来日した時に本格的なコラボが始まりました」

江戸時代から続く老舗でありながら、海外のアーティストとのコラボや新製品の開発など革新的な試みも積極的に行っている日吉屋。伝統と革新のバランスについて、どのように考えているのだろうか。

「伝統的な商品と革新的な商品は車の両輪だと考えています。伝統からインスピレーションを起し、革新的な商品が生まれる。その商品が一度性ではなく継続的にその時代に受け入れられ、

普通の商品となる。そして時間の経過とともに、緩やかに伝統的な商品に変わっていく。その過程でまた新たな革新が起こる。こうしたサイクルを繰り返すことが、正常なものづくりの考え方ではないかと思っています」と西堀さんは言う。

3年後の東京オリンピックに向けて、日本文化がさらに海外へ発信されていく機会も増える。そんななか、日吉屋の「KOTORI」はさらなる注目を集めることだろう。

(黒田隆憲)

創業百余年、京都で5代にわたり和傘を製造している老舗「日吉屋(ひよしや)」が、京和傘の伝統技術を活かして作った和風照明シリーズ「KOTORI」が今、話題になっている。

一般家庭での利用や贈り物としても人気があり、さらには店舗、レストラン、商業施設やホテルなどからの問い合わせも多いという。

「弊社では江戸時代から伝統工

芸の京和傘を制作していますが、ライフスタイルの変化に伴い、伝統的な商品だけでは限界を感じていたなかで、2004年(平成16)頃より和傘の技術や美しさを活かせる新たな商品



開発に取り組んで来ました」

そう話すのは、日吉屋5代目の西堀耕太郎さん。和傘の持つ幾何学的な竹の骨組みや光を透過させる手すき和紙の美しさに気付き、これを発展させて照明器具に転用することを思いついた。

試行錯誤を繰り返して、最終的には照明デザイナーたちのコラボレーションプロジェクトを本格的に開始し、2006年12月に発売に至った。

傘のように開閉することができ、コンパクトに収納・運搬できることも「KOTORI」の特徴の一つ。アジア、ヨーロッパ、北米、オセアニアなど海外からの注文もコンスタントにあるという。

また最近では、パリ在住の和紙を使うデザイナー、ヨルグ・ゲスナーさんともコラボレーションをしており、氏による「Butterfly」、「KANZE」、「NICHIRIN」という3種類のデザインも人気を博している。

「2008年に、ドイツで開催されたインテリア関連の国際見本市会場で、知り合いから商業デザイナーとしてヨルグ氏を紹介されました。その時、『和傘の構造に興味がある』と彼が話



1 京都市上京区にある日吉屋本店の内部。2 折りたたむと和傘のようになるコンパクトな「KOTORI」。3 日吉屋5代目西堀耕太郎氏。4 パリ在住のデザイナー、ヨルグ・ゲスナー氏。



伝統力 KOTORI 京都府京都市上京区 京和傘の伝統と技術を活かした照明器具

京都で江戸時代から続く京和傘の5代目が、和傘の構造を活かした照明器具を作り出した。海外アーティストとのコラボ商品も生み出し、国内外から注文が相次いでいる。

漁師力 真蛸としめじのアーヒージョなど 愛媛県越智郡上島町魚島村 瀬戸内海の離島で生きる 漁師たちの新機軸

従事者の高齢化や後継者不足、漁獲量の減少に危機感を感じていた魚島の漁師たちが、名産のタコをつかった加工品の製造や、回転寿司チェーンとの「船買い」契約などにより、収入増加のための取り組みを行っている。



魚島の海の玄関口である魚島漁港。

魚島(うおしま)の海苔と出会ったのは、昔参加したお花見の席だった。持ち寄った料理に皆で歓声をあげているところに、ふと一人の友人が郷里の海苔を取り出した。その登場に意表をつかれたものの、一口食べると海苔の厚みと濃厚な風味に「ウマイ」。食すたびに瀬戸内の海が見える気がした。興奮が連鎖し、一同、目の前の料理も忘れて、魚島の海苔のトリコになってしまった。

この海苔の生まれ故郷である魚島(越智郡上島町)は、面積1・49㎢の小さな離島。上島町(かみじまちょう)は近隣に点在する25島で構成されている自治体で、2004年(平成16)10月に吉野町、生石村、岩城村、魚島村の4町村が合併して誕生した。

毎年八十八夜の前後、タイをはじめとする魚が産卵のため瀬戸内海にたくさん集まる時期を「魚島時(うおしまとき)」という。この時期に限らず、魚島はよく魚が獲れ、漁業が盛んな土地柄だ。とはいえ、20年前に100軒以上あった漁師の家は、現在17軒に。高齢化や後継者不足により漁獲量が減ったことが要因だ。

しかし今春、そんな状況を打開する取り組みが始まった。大手回転寿司チェーンの株式会社くらこポーレーション(大阪府堺市)との年間契約だ。現在、魚島漁業協同組合に所属する3軒が契約を結んでいる。

魚島漁協の村上要二郎さんは、「従来のやり方



1 タコツボを用いた魚は魚島の伝統的なスタイル。2 魚島では海水浴(夏場)やBBQ、釣りなどが楽しめる。今年から漁師の船で島を周遊する観光漁業も行う予定。

では収入が下がる一方と懸念していた漁師さんたちにも積極的にご参加いただき、約1年かけて営業活動を行った結果、くらこポーレーションと契約を結ぶことができました」と話す。

契約は「船買い」というシステムを採用。定置網で獲れるすべての魚種が購入対象となる。「メリットは収入が安定すること、今まではお金にならなかったようなボラやアカエイなども、タイなどと区別されずに買ってもらえます。そのうえ、仲買人を介さないため、中間のマージンが還元されます」。

漁師たちにはやりがいがある。れ、くらこポーレーションのバイヤーとも良好な関係を築いているという。「次第にバイヤーを喜ばせたいという思いが生じています」(村上さん)

また、今年新たに愛媛県出身の料理研究家・中村和憲さんと魚島村漁協女性部が約1年かけて開発を行った「魚島グルメシリーズ」のクラムチャウダーとアイヤベースが、今年8月下旬の「第19回ジャパンインターナショナルフードショー」(東京ビッグサイト)に出品された。こうした商品が瀬戸内海の海の幸を伝える案内人になることを期待する。

(御田けいこ)



東京では明治屋全店、日本百貨店町田、日本百貨店東京駅、大阪では愛媛県のアンテナショップや梅田グランフロント内「ぐるなび」などで購入可能。